

◆養徳社エッセイ賞一等入選作

おやゆび王子

こけまる



大学生の私は、埼玉の実家から電車に乗って、都内にあるバイト先の焼肉店に向かっていた。その日は夜勤で、午後七時から朝の四時までのシフトだった。

店までの距離は遠かったが、片道一時間半の移動時間も、好きな読書に充てていたので何ら苦ではなかった。

*

その日も、昼下がりの乗客の少ない快適な電車に揺られながらのんびり本を読んでいた。

どこかの駅に着いて扉が開くと、私はそっと本から目を離し、無意識だが席の空き具合を計

っていた。目の前の七人掛けのシートには、三人しか座っていない。ガラガラだ。横目で周りの様子を窺うと、こちら側のシートも、まだふた席ほど空きがあるようだ。一つは、私の左隣の席だった。休日はやっぱり空いてるなあなんてぼんやり思いながら、また本に視線を戻した。

走り出した電車の中で、すっかり本の世界に

浸っていたが、ある瞬間にふと違和感を感じた。

右手のほうから、誰かが歩いてくる。顔を上げはしないが、男性だとわかる。自然と意識がそちらにいく。かなりゆっくり歩いてる様子

だ。まるで、何かを物色しているかのよう。

近づいてくるほどに、歩調がさらにゆっくりになる。一メートルを切ったところで、非常に嫌な予感がした。ちよつと待て、と思った矢先、その男性は立ち止まったのだ。そう、私の目の前で。

(……マジか)

焦った。ガラガラの車内で、いきなり女子の目の前で立ち止まる奴があるか。本を広げているのでは、狸寝入りもできない。どうしよう。ただ、周りにも人はいるし、突然襲ってきたりはしないだろう。ちよつとだけ視線を上げてみると、恐ろしいことに、完全に私を見下ろしていた。微動だにしない。周囲の人たちも、その不審な男性と私を不安げに見ているのがわかる。痛いほどの視線だ。

(なんで、私……?)

じつと、立っている。不気味だ。幸いにも私はイヤフォンをしていたので、気づかないふり、知らんぷりをしようと決め込んだ。そして、少しの間無視し続けると、その男は立ち去る気配を見せた。きびすを返し、隣の車両の方へと歩いて行く。後ろ姿を盗み見ると、それは中肉中背でだらしく髪の毛を伸ばした、オタクっぽい感じの人だった。不吉な例えだが、ジェイソンみたいだ。周りの人たちも、何事も起きなかつたことにホツとしている。私はお守りみたいな本を閉じ、深呼吸をして心を落ち着けた。

*

平和な時間は、疾く過ぎ去ってしまう。五分も経たないうちに、今度は戦慄が走った。周りの人の視線が、微妙な一体感をもって動き

こけまる

35歳／会社員／東京都在住

「文章を書き始めてまだ間もないですが、今回このような賞をいただきに感激しました。こんな風に、主観と客観を交えたエッセイをこれからもどんどん書き続けたいです。

そして『書くこと』と『読むこと』の楽しさを、自分の作品を通してたくさんの人に伝えていけたら最高です」



出したのだ。彼らの見ている先には、間違いない私が入っていた。顔を上げ、様子を窺う。何人かの人たちが、あの方向をじっと見つめている。

そして、交互に私を見るのだ。まるで、奴がきたぞ！ と私に知らせるように。

来た。さっき向かった隣の車両の通路から、その男

はまた姿を現した。今度は私も顔を上げていたので、目が合ってしまった。大きな二つの目が、じつとりと不気味にこちらを見ている。慌てて下を向いたが、手遅れだ。冷や汗が出てくる。大股で、ゆっくりと歩いて

くる。私の心臓の音がどんどん大きくなる。これじゃ、まるでホラー映画じゃないか。男は迷うことなく、まっすぐこちらに向かってくる。

またか、と思ったその時、信じられないことが起きた。男は、背負っていたリュックを抱え、空いていた私の左隣の席にドスンと座ったのだ。

(……オワった)

なにこれ。口から魂が抜けそうだった。周りの人たちにとっても、まさかの展開だったに違いない。しかし、彼らもじっと見守るので精一杯だろう。でもその視線は、「逃げた方が……」と伝えてくれているようだった。

終点までまだ二十分はかかるので、別車両へ逃げようか迷った。が、また途中でどっか行くかもしれない。今は、隣でおとなしく座っているだけだし、やっぱりしらばっくれるのが一番

だろう。そう決心して、無言の我慢比べが始まった。
外し、

「……はい？（あんたはいつたい）なんですか？」

一文字も入ってこない本を広げながら、全力で平静を装う。でもやっぱり、左隣からものすごい視線を感じる。男はチラチラとこちらを見ながら、なんだか落ち着かない様子だ。私が素知らぬ顔で無視を続けると、ついに。

と尋ねる。すると男は、もごもごしながら私の顔と、私の左手を交互に見て、こう言ったのだ。

「その、親指のサカムケ。だ、大丈夫ですか？」

さ……サカムケ？

「あの、すみません」
(キターーー！)

頭の中が真っ白になった。コントだったら、

まさか、話しかけてきた。私も周りもぎょっとして、その男の方を向いた。だらしなく伸びた髪の毛の間から、大きな目が不気味にまっすぐこちらを見ている。目の前で見ると結構強烈だ。しかも口元は笑っていて、かなり異様な雰囲気。普通に、怖え。しかし話しかけられて、答えぬわけにいかない。恐る恐るイヤフォンを

その場にいる全員がズッコケるところだ。私は、恐る恐る自分の左手に目を落とす。たしかに、私の左手の親指はサカムケしていた。しかも前日のバイトで冷蔵庫にぶつけて、赤みが増していたのだ。しかし、電車の中でジェイソン似の不気味なおじさんに助けてもらうほどの緊急事態ではない。むしろこの状況を誰か助けて。

「……あ、これ？ 平気、大丈夫です」

そう言って、必死に動揺と親指を隠しながら音楽の流れていないイヤフォンを耳に押し込み、急いで会話を終わらせた。心臓はバクバクだ。顔も赤くなっているだろう。もう、怖いやら恥

ずかしいやらで、穴があったら即座に入りたい。しかし、その男は諦めなかった。

「あの」

勘弁してくれ。しかし、一度会話してしまっただけで無視もできない。仕方なく再度イヤフォンを外して、はい？ と答えると、今度はリュックに手を入れながら、

「本当に大丈夫ですか。その親指。(ガサゴソ) あの、良かったらこれ……」

と何やら差し出してきた。なんと、キティち

やんの絵柄が描かれたピンク色の絆創膏だった。

私の顔が思いつ切りひきつる。いるかボケええ！ 怖いんじゃああ！

「本当に、大丈夫ですからっ」

と、少し語気を強くして、完全にシャットアウトした。周りの人たちも、いろんな意味で目と耳のやり場に困っているのがわかる。もう、怖いというより、恥ずかしい。

そうですか、と絆創膏を持った手を引っ込める。しかしその男は、納得いかない様子だ。だが私も、ここまできたら頑固一徹でこの場を凌ぐしかない。負けてたまるか。

話す気を失ったのか、男は沈黙している。永遠みたいな三分が過ぎると、唐突にその男は立ち上がった。私は、ひよええと声が出そうになるのを我慢して、じっと息をひそめた。男は、

数秒その場に立ち尽くし、そして何かを決心したかのように歩き始めた。私は首を伸ばし、後ろ姿を目で追うと、その背中は隣の車両の奥の奥へと消えていった。

やっと、地獄が終わったんだろうか。終点まで、あと少し。私はだらりと体をシートに埋めて、ただただそれが戻ってこないことを祈った。とにかくお疲れ、私。

*

電車は、何事もなかったように終点の池袋駅に着いた。ドアから降りた瞬間、注意深く周りを見渡したが、異様なものは何もなかった。いつも通りの駅と、いつも通りの人混みだ。悪い夢でも見ていたんだろうか。駅の北口を出て五分ほど歩き、バイト先の店に着く頃には、拍子抜けするほどの日常がそこにはあった。

*

店に着いた瞬間から、戦場みたいな忙しさだ。

幸いにも動きっぱなしの接客仕事のおかげで、夜の〇時を過ぎたころには、その奇妙な出来事は頭の中からすっかり消えていた。

朝まで働いた日は、始発を待つために近くの居酒屋で、みんなで軽く一杯やる。その日も、四時半には近くの串焼き屋さんに行った。そして始発が走り始めた頃に店を出て、私は一人、始発の次の電車に乗りこんだ。さすがに五時台の下り電車は空いている。適当な席に座って、本を広げる。

災いというのは、忘れた頃にやってくるものらしい。

*

何かが、おかしい。異様な何かを感じる。そんなはずはない。そんなはずがないのに、寒気がする。ガラガラの車内の中で、確かに右のほ

うに何かを感じた。恐る恐る、視線を右にずらす。「あっ！」と叫び声をあげそうになった。それは、そこにいたのだ。同じ服、同じ髪、同じ顔。そして、同じ黒いリュックを抱えている。斜め向こうのシート。それは座席に座りながらも、顔と上半身が不自然にこちらを向いたまま、大きな目で不気味に私を捉えていた。

ッ……!/?

全身の毛が逆立つ。なんで、どうしているの。悪夢だろうか。いや、残念ながら現実だ。あれからつけられた？ でも、一晩中？ 誰かに助けを求めようか。でも。周りは眠っている人ばかりだ。どうしよう、次の駅で降りようか……。色々な考えが一気に頭の中を巡る。ゴクリと唾を呑み、もう一度そちらに目をやる。あれ？ ……男は、下を向いていた。寝ている様子では

ないが、下を向き続けている。半日前のように、こちらへ向かってくる気配はない。

うーん、私の思い過ごしかもしれない。一晩中見張っていたなんて全く現実的ではないし。向こうはマン喫なんかで朝を迎えて、たまたま朝の同じ電車で鉢合わせたのだろう。さつきだって、あまりの偶然にびっくりしてこちらを凝視していたに違いない。状況を冷静に分析することで、少しずつ自分の心を落ち着けた。その後も何度かそちらを見たが、おかしい様子はない。ほら、今だってあの黒いリュックから本を取り出して読んでいるじゃないか。右手に本を持って、左手はリュックの上に置いて……。置いているはずの左手が、不自然にうごめいている。何だろう？ 訝しんで、目を凝らしてしまった瞬間、私の全身は凍りついた。

右手に持った本の下で、その左手は、はつきりと私に向かって「親指」を立てていたのだ。